

社説「脱亜論」と用語としての「脱亜入欧」——その受容の系譜

平
山

洋

【論文】

社説「脱亜論」と用語としての「脱亜入欧」——その受容の系譜

平 山 洋

はじめに

福沢諭吉が執筆して明治十八年（一八八五）三月十六日に新聞『時事新報』紙上で発表したとされる社説「脱亜論」は、掲載百四十年を経過した今日もなお高い「人氣」を誇っている。もっとも、この場合の「人氣」とは、その題名が世間一般でよく知られているという事実を示しているだけであって、内容が多くの人々に高く評価されているとか、現代人の行動に影響を与えているとかいう意味ではない。

二十一世紀初頭のある時期まで、「脱亜論」の名は悪名としてのみ轟いていた。しかし論者の見るところ凡そ二〇一〇年辺りから風向きが変化してきている。社説「脱亜論」の内容をより積極的に評価するべきだとする書籍が続げざまに刊行された（註1）ことをきっかけに、「脱亜論」はその汚名を返上しつつある。そうした状況の変化がいかにしてもたらされたかについてはそれ自体興味深い問題ではあるが、研究の対象とするには時間の経過が短すぎる。そこで本論者が目指すのは変動激しい近年の「脱亜論」研究の動向をたどることではなく、その始原から遠山茂樹によって紹介される昭和二十六年（一九五二）の後概ね五〇年代末までの受容の過程を「脱亜入欧」という近似した用語と絡めて探究することにある。

一 「脱亜論」受容の研究史

本論に入る前に社説「脱亜論」受容の研究史を要約するなら、この問題についての考察はこれまで五度試みられている。

その第一は橋川文三によるもので、昭和四十三年（一九六八）一月の雑誌『中国』連載論文「近代日本指導層の中国意識―福沢諭吉」（後に「福沢諭吉の中国文明観」と改題）で、「脱亜論」が有名になり出したのは、ごく最近のことかと思われる」（『橋川文三著作集』第七巻（筑摩書房・一九八六年二月）四頁）として、その源流を鹿野政直の『日本近代思想の形成』（新評論社・一九五六年六月）まで遡っている。

第二は平成二年（一九九〇）九月の丸山眞男による日本学十院報告「福沢諭吉の「脱亜論」とその周辺」で、「脱亜論」の福沢全集・選集への収録状況を調査した結果、「脱亜論」というものが戦後のある時期―私は戦後史をやっていないので分からない―で分らないんですけれど―おそらく一九五〇年代末から六〇年代初めにかけて急激に注目され出した、そしてついに、まるで福沢という「脱亜論」というくらいに、一般のイメージになったということを暗示しているんじゃないかと思います」（『丸山眞男話文集』四（みすず書房・二〇〇九年三月）五、六頁）という結論を導いている。

第三は平山洋『福沢諭吉の真実』（文春新書・二〇〇四年八月）による調査で、その第5章「何が「脱亜論」を有名にしたのか」において橋川による「脱亜論」受容史を踏襲しつつ、遠山茂樹「日清戦争と福沢諭吉」（『福沢研究』第八号（福沢先生研究会・一九五一年十一月））での「発見」を発見している（『福沢諭吉の真実』一九五頁）。また、「脱亜論」は「掲載されて四八年後に初めて『続全集』に収められたものの、さらに一八年を経過した遠山茂樹の発見まで「脱亜論」は誰の注意も惹くことはなかったと考えられるのである」（『福沢諭吉の真実』二〇八頁）と推測している。

第四は平石直昭『福沢諭吉と丸山眞男』（北海道大学出版会・二〇一二年十二月）の第5章「福沢諭吉の東洋政略論の研究史」における追究で、第二次世界大戦終結時から一九七〇年代までの研究史が整理されている。同著は平山著作で言及されていない坂野潤治の『明治・思想の実像』（創文社・一九七七年十月）と青木功一の「脱亜論」の源流」（『新聞研究所年報』第十号（慶應義塾大学・一九七八年二月））を、現在につながる「脱亜論」の評価への転換点として重視している。

第五は小川原正道による福沢評価史『福沢諭吉・変貌する肖像』（ちくま新書・二〇一三年八月）での「脱亜論」受容史の整理である。同書は福沢の評価全般を扱っているが、「脱亜論」受容についてもよく調査されていて、第一から第四までで扱われている全論文を紹介している。

社説「脱亜論」の受容史は概ね以上の経緯をたどっているが、その基本線としては、昭和二十六年（一九五二）に遠山茂樹が

「発見」し、それから四半世紀の間にその「悪名」は広く行き渡ったものの、昭和五十年代初頭の坂野潤治と青木功一の先駆的業績をきっかけに二十一世紀に入ってからは汚名の返上が進行しつつある、ということまでは定説とみなしてよいように思う。こうして定説化した「脱亜論」受容史であるが、ここにきて重大な変更を迫られることになった。結論を先取りしてしまえば、社説「脱亜論」を発見したのは遠山茂樹ではなかったのである。それはどういうことか。そのことを跡付けるために、その発表の始原から戦後の遠山論文「日清戦争と福沢諭吉」までの受容史を再検討する必要がある出てきたのである。

二 「脱亜論」「時事新報」紙上に掲載される（一八八五年三月）

無署名で発表されているため「脱亜論」を福沢諭吉が書いたとは断定できない。とはいえ現在までその執筆者が福沢であることを疑う研究者はいない模様である。

そこでこの「脱亜論」は、開国後の日本の主義を「脱亜」と称したうえで、西洋的近代化の潮流に抗している清国や朝鮮と協働することはもはやできない、彼らを見捨てて西洋列強と一緒に動くべきだ、とする四百字詰原稿用紙六枚程度の社説である。いかにも手厳しい言いようではあるものの、この清国朝鮮批判には理由があった。すなわち前年明治十七年（一八八四）十二月、朝鮮の近代化を目指す金玉均ら独立党が漢城（ソウル）でクーデターを決行し、三日後清国軍に鎮圧されるという甲申政変が勃発し、独立党を支援していた日本の公使館も清国軍の焼き討ちに遭って日本人の死者も出ていた。この政変に際して、門下生を朝鮮に送って金玉均らの活動を援助していた福沢の主宰する『時事新報』の紙面が新聞各紙の中でも特に熱を帯びたのも当然である。「脱亜論」は独立党のクーデター失敗に対する失望を背景に書かれたのである。

とはいえ掲載当時「脱亜論」は同時期の読者に何らの印象も残さなかったようだ。国立国会図書館のデジタルコレクション（以下国会DC）で「脱亜論」を検索すると、この年「脱亜論」に言及しているのは交詢社が刊行していた『交詢雑誌』一八二号（一八八五年三月二十五日）の表紙裏にある「東京五新聞社説旬日表」にその表題が見出せるのみである。そこに内容への言及は一切ない。

脱亜という言葉に着目するなら、既に学士院報告で丸山眞男が指摘していることだが、現行版『全集』に収録されている全文章でその言葉が使われているのは「脱亜論」だけである。もっとも全集非採録の社説については一度だけ「脱亜」の用語が検出できる。それは豊浦生「日本は東洋国たるべからず」（一八八四年十一月十一、十三、十四日掲載）の十三日掲載分中「或人が

興亜会なるものを設けたるは、日本人の馬鹿律義に出でたるものにて、自から好んで其位地を損するものと云ふべし。余は興亜会に反して脱亜会の設立を希望する者なり」という一節においてである（註2）。

豊浦生とは在英の弟子日原昌造のことで、この「日本は東洋国たるべからず」の自身は「脱亜論」とほとんど同じである。そうなると四カ月後の「脱亜論」はこの日原の投稿論説の影響を受けて福沢が書き下ろした社説と判断するのが妥当となろう。しかしその後福沢はこの「脱亜」という言葉を封印して二度と使うことはなかったのである。

では用語として一般に流布している「脱亜入欧」はどこに由来するのかと国会DCで検索してみると、やはり結果的に丸山による調査と同じとなるが、内山正如編『日本之輿論』一名・当世名士時事活論（博文館・一八八七年七月）が最初に検出される。その奥付には明治二十年六月二十七日出版御届、同七月出版、編集人は新潟県平民内山正如、出版人は山本東策とある。内容は新聞各紙の社説集で、「脱亜入欧」という言葉は山陽新報主筆鈴木寿太郎の「欧化主義を貫かざる可らず」（七二～六頁）の中に現れる。

『山陽新報』社説欄への掲載は明治二十年四月十五日で、「左の一篇は鈴木が此程某所に於て演説したるものの大要なり」との前書きに続けて、

脱亜入欧は我国開国以来の主義にして今後益々此主義を拡充せざるべからず。偶々腐儒ありて亜細亜連衡の利を説き又興亜の要領を主張すと雖も斯くの如きは則ち固より取るに足らざるの迂論にして抑々亦開国以来の大主義を忘れたるものと云ふべし。（七二、三頁）

と本文が始まっている。その内容は『時事新報』に掲載された「日本は東洋国たるべからず」と「脱亜論」とほとんど同じで、四百字詰原稿用紙五枚程度の本文中に「脱亜入欧」が四回、「脱亜」が一回使用されている。

鈴木は慶應義塾の出身でもあることだし、この「欧化主義を貫かざる可らず」が『時事新報』掲載の二編の影響を受けていることは、冒頭で亜細亜協会（興亜会の後身）の活動に触れていること、また結論部近くの表現が「脱亜論」にそっくりであることから、間違いのないことである。

そこで鈴木が「日本は東洋国たるべからず」掲載の二年五カ月後、「脱亜論」掲載の二年一カ月後に「欧化主義を貫かざる可らず」を発表した理由について推測するなら、前年八月に勃発した清国水兵による乱闘事件（長崎事件）がその二月に外交上の解決を見たものの、なお清国政府への反感が国内に充満していたこと、さらには清国による日本への攻撃のうわさが巷間に広まっていたことが挙げられる。甲申政変で独立党が敗退してから朝鮮は清国の傀儡国化しているばかりか、同時に進行していた清仏

戦争でも清国のほうが優勢である、というというのが当時の国内報道に促された日本の一般国民の認識であった。

『時事新報』掲載後「日本は東洋国たるべからず」と「脱亜論」は単行本に収録されなかったのに対して、『山陽新報』という地方紙に掲載されたこの「欧化主義を貫かざる可らず」は単行本『日本之輿論』に収められたことが後世への影響の差を生んだ。『日本之輿論』は公共図書館や大学図書館に配架されてやがて研究者の目に留まることになったのである。

三 「脱亜論」小栗栖香頂『見真大師の精神』で言及される（一八九三年九月）

大正八年（一九一九）になるまで新聞縮刷版は製作されていなかった。そのため福沢の立案として単行本化されたごく一部の『時事新報』社説群を例外として、掲載社説を後に読みなおすのは難しかったと考えられる。「脱亜論」が『続全集』第二巻に収録されたのは昭和八年（一九三三）七月のことであるから、掲載された明治十八年（一八八五）三月十六日の直後を除いて、その後四十八年四カ月が経過する間に「脱亜論」が言及されることがあるとは思ってもよらぬことであった。

ところがそうではなかったのである。国会DCで検索すると、『続全集』刊行前に一件だけ「脱亜論」が抽出される。それは小栗栖香頂の演説『見真大師の精神』（日新館・一八九三年九月）においてである。この見真大師とは親鸞のことで、浄土真宗大谷派に属する僧侶の小栗栖が明治二十六年八月十三日に福井市の大谷派別院で行った演説の筆記を近隣在住の宇佐美賢尊・松溪教悟の二人がまとめ、松原榮を発行兼印刷人とした、同年八月二十八日印刷、九月三日発行、全二十一頁、非売品の小冊子である。百三十年前の福井市でおそらく少数しか作られなかった布教用のパンフレットなど、国会図書館がデータ化しなければ絶対に見つけ出すことはできなかったはずのまさに稀覯本である。

内容に入る前に先に講演者である小栗栖香頂の紹介をするなら、その生涯は『小栗栖香頂略伝』（明治館・一九〇七年）によれば以下の通りである。

天保二年（一八三一）八月四日、豊後国大分郡戸次妙正寺に生まれる。

天保十一年（一八四〇）本山において得度する。

天保十二年（一八四一）臼杵藩藩校に入学する。

弘化元年（一八四四）野中処平・生野春平とともに帆足万里に入門する。

弘化二年（一八四五）日田の咸宜園に入門する。

嘉永五年（一八五二）上京し、諸宗の教義を学ぶ。

明治元年（一八六八）三月七日、学寮において擬講となる。

明治三年（一八七〇）一月、政府より東本願寺に北海道開拓の命が下る。香頂、北海道巡回説教に参加する。

明治六年（一八七三）七月十七日、清国に渡り、教情の視察と留学を行う。

明治七年（一八七四）七月八日、病氣と資金切れにより、帰国の途につく。

明治九年（一八七六）七月十一日、香頂の意見が本山に容れられ、東本願寺は清国布教のために香頂ら六僧を上海へ派遣する。八月二十日、東本願寺上海別院が開院される。

明治十年（一八七七）一月十四日、香頂病氣のため、帰国する。

明治十六年（一八八三）五月、京都において上等教校の教授となる。

明治十八年（一八八五）二月、東京在勤を命じられ、三月十五日に浅草別院に到着、四月一日から小島教校において論註・選択集を講ずる。

明治十九年（一八八六）十一月四日、浅草別院において貴婦人会を開く。

明治二十二年（一八八九）一月、本山から関八州教学策進委員長に任じられ、以降、各地を巡化する。

明治三十二年（一八九九）十月、巡化のために尾張一宮に来訪した際、持病の発作を起こす。同月十一日に戸次妙正寺へ帰る。

明治三十八年（一九〇五）三月十二日、妙正寺本堂前において発病。同月十八日に死去する。

福沢との関係は後述するが、見られるように四歳違いのほぼ同郷人で大谷派の巡回説教に携わり清国でも布教活動をしていた人物である。上海から帰国後主に京都で教職に就いていたが、本山の命により東京に移った直後に社説「脱亜論」を読んだことになる。

さて話を『見真大師の精神』に戻すなら、先にも触れたようにこの小ぶりのパンフレットの奥付には明治二十八年（一八九三）八月二十八日印刷、九月三日発行とある。発行所は日新館、印刷所は有隣館とあって、いずれも福井市内の施設である。宇佐美と松溪の二人の著者（奥付の表記、緒言には編輯者である）も発行兼印刷人の松原も全員福井の人で、この『見真大師の精神』は本山の指導によってではなく福井の別院の関係者が独自に製作したものであった。すなわちその緒言には、「小栗栖香頂字師本山の嚴命を帯び来越に際し越前貴婦人会を開き其発会式を本月十三日別院本堂に於て挙行せられしに（中略）来賓の名前を列

挙げた後）頗る盛会なりしが本日学師の精神は一場の演説と聞き流しては遺憾なれば有志に謀り印刷に付し以て江湖に頒つ」（カタカナ表記をひらがなに変換）とある。

引用文中の貴婦人会について先行研究は「真宗大谷派の貴婦人法話会は、明治十九年六月に法王現如が先頭となって設立されたものである。それは新しい布教方法の一つで、仏教界の先駆けとなったといわれる。この会は各地別に組織が設立されたが、東京の場合、第一回は同年十一月ごろに同派の浅草別院で開催されている」（三浦節夫「福沢諭吉・井上四了・寺田福寿・小栗栖香頂」『福沢諭吉年鑑』一三三（福沢諭吉協会・一九九六年十二月）四四頁）と説明している。先に掲げた小栗栖の年譜を見れば明らかなように、この東京の会を十一月四日に主宰したのが小栗栖だったわけである。

演説の内容に移ろう。先にも触れたようにその本文は全部で二十一頁、四百字詰原稿用紙にして二十三枚程度の分量である。最初の三頁ほどで貴婦人会の由来と開催の現状について触れた後、四頁八行目から五頁五行目まででその活動の目的について女性を中心にキリスト教の国内への浸透を防ぐところにあるとしている。ただしそれはより大きな目的の一部としてであった。すなわち五頁六行目から十一頁五行目までがその大目的について扱っていて、それはそもそも浄土真宗の目的は「朝家の御為」の宗旨として国家に尽くすことであり、明治維新によって天皇中心の国家体制が樹立されたことで国内的な動揺については心配がなくなったものの、対外的には西洋諸国によるアジア侵略という不安材料があるためその対策をする必要がある、というのである。そうして続く十一頁六行目から十二頁九行目までの十六行が社説「脱亜論」に関係する問題の部分である。少し長いが当該段落の全文を引用する。

五大州の地図を御知りになりてある御方は、私と御同感の人も有ふ歟と存知ます。五大州の其中に一番強ひのが欧羅巴の中で魯西亞と英吉利と仏蘭西と独逸とが強といへども其中で魯西亞と英吉利とは最強くありました。英吉利は亜西亞の中最早や天竺を取ております。緬甸を取ております。香港を取ております。段々と亜西亞の区域が縮でまいます。おろしやおろしやの都より西部里亜を貫て浦塩斯德まで鉄道を掛ると申します。ウラシホストックといふ所は北海道より近くあります。新潟より近くあります。日本人が天竺を廻らずして魯西亞にまいるには殊の外の便利になりましたがまあ気味の悪いこととであります。女といふ字を中に書て男といふ字を両方に書は嬬の字になります。是は一人の別嬪を兩人の男がなぶりものにするのであります。亜細亜と云ふ別品を魯又と英吉利がなぶりものにいたしておる様に思はれます。私は隣国の支那朝鮮が亡びねばよいがと思ひます。昔より支那朝鮮日本は唇齒の国と申します。唇を滅びて齒寒しの道理で支那朝鮮が亡ぶれば我日本はどうなるであろうと思ひます。先年脱亜論といふ一片の文章を見ました。あの心が頑固なる亜西亞の仲間を脱し

て文明なる欧羅巴の仲間入りをせよといふ心とみへますが夫が未来記となりて亜西亜はなくなりて欧羅巴人に取れる様になりましては甚だ残念なことであります。(表記一部替え)

このように小栗栖は社説「脱亜論」の主題を、西洋諸国によるアジア侵略の脅威を背景に、日本はアジアを脱して欧州に仲間入りするべきだ、という主張とみなしつつ、同時にアジアが欧州人の支配下に置かれる未来を危惧している。そうして以後結末までの九頁にわたってどのようにすればそうならないで済むかについて小栗栖ならではの考えが示されている。

小栗栖によればすでに欧州勢力の下にある天竺(インド)・緬甸(ミャンマー)・暹羅(タイ)が弱かったのはいずれもが小乗仏教(上座部仏教)が支配的であったためであるという。それに対して浄土真宗も属している大乘仏教は朝家の為の精神が強いことによりそれが侵略への抵抗力になるというので、欧州の侵略に直面している中国と朝鮮に浄土真宗を広めることによってその野望を挫くことができるのではないかと提案している。

以上が小栗栖の演説の内容だが、そこで「脱亜論」に触れているのは先に引用した一カ所のみ、しかもその内容に賛同するわけでも否定するわけでもなく、欧州によるアジア侵略への危機意識を高めるための実例として挙げられているだけである。いたい小栗栖はどういう経緯によってここに「脱亜論」を引用したのであるうか。そもそも小栗栖と福沢はどのような関係にあったのか、次に福沢諭吉と小栗栖香頂の関りについて述べることにする。

この二人の関係について扱っている研究は先にも触れた三浦節夫の「福沢諭吉・井上田了・寺田福寿・小栗栖香頂」が唯一であるようだ。それによれば福沢と小栗栖は福井での講演の約一年半前の明治二十五年(一八九二)三月二十三日に福沢邸で開かれた法談会の席で直接面会している。そもそもは福沢が弟子で真宗の僧侶でもある寺田福寿に法談会での話者の推薦を依頼したのがきっかけである。そこで推されたのが東京に赴任後貴婦人会の組織化に邁進していた小栗栖であったわけである。

この法談会の記録は『朝家の御為』第壹集(哲学書院・一八九三年三月)に収録されている。目次には「是真会三周年会の演説」「三田福沢邸の説教」「二翁の問答」の三編が収録されている。先に触れた『見真大師の精神』とは異なりこちらの版元は東京の哲学書院で発行者兼編集者は井上田了の息子の田成である。三編のうち後ろ二編が福沢邸で行われた説教と問答の記録であるが、問答については福沢の許可を得ずに収録されたため、福沢が抗議の手紙を書いたといういわくつきのものであった。

福沢と関係があるこの二編は真宗の教義の説明と質疑応答に終始していて、社説「脱亜論」と関係するような国際問題にはまったく触れられていない。国会DCで検索すると小栗栖には演説集・著作併せて四十四冊ある。「脱亜」という用語は使われていないまでも内容的に関係する議論がなされていないかと、端的に「亜」一文字で検索して抽出してみたが、いささかなりとも関

わりそうな部分は先の引用以外に発見できなかった。要するに小栗栖が「脱亜論」自体に言及したのは今のところ『見真大師の精神』での一度しか確認できないのである。とはいえそれは記録されている分にすぎないので、数多の説教をしていた小栗栖が「脱亜論」に言及したのが一度切りだけだったということはないであろう。社説「脱亜論」の存在は小栗栖を始初として真宗門徒の間にはある程度は知られていたのではなからうか。

以上が社説「脱亜論」の最初の紹介に関することどもだが、それとは別に「脱亜入欧」という言葉の流布にまつわる問題もある。次節ではその「脱亜入欧」という言葉がどこに由来し一般に周知されたかについて扱うことにする。

四 「脱亜論」『続福沢全集』第二巻に収録される（一九三三年七月）

国会DCで調べた限りでは、「欧化主義を貫かざる可らず」の最初の言及は清原貞雄著『明治時代思想史』（大鏡閣・一九二一年十月）にある。その内容はいえれば明治維新による王政復古を高く評価し、逆に明治中期にかけての欧化主義を強く批判するものになっている。

容易に想像できるようにそこでの最大の悪役は福沢諭吉とその弟子たちであった。すなわち『明治時代思想史』第二期「明治八九年より明治二十年頃に至る」の第二章「西洋心酔」において、その最たる例として日本人の体格改善のために西洋人との交雑を提唱する高橋義雄の『日本人種改良論』（石川半次郎・一八八四年九月）を批判的に紹介した後、「福沢諭吉の如きも亦之に賛意を表せり」（九二頁）とまとめている。そしてその次の頁で取り上げられているのが「欧化主義を貫かざる可らず」等で、「二十年の頃駒林広運が出羽新聞紙上に西洋風を学ぶに躊躇する勿れと論じ又鈴木券太郎が山陽新報紙上に欧化主義を貫かざるべからずと論ぜる如き一般の思潮察すべきなり」（九三頁）とある。清原は出典を明示していないが、駒林の社説も『日本之輿論』に収録されているところから同書からの孫引きで間違いないであろう。

昭和四年（一九二九）に広島文理科大学教授となる以前は内務省や陸軍省に所属して官吏や軍人の教育に携わっていた国粹主義的思想史家である清原貞雄の名前は今ではすっかり忘れられている。しかし第二次世界大戦終結までは神道史や日本思想史の研究者として著名であり、この『明治時代思想史』も多くの読者を獲得したと考えられる。

清原が「欧化主義を貫かざる可らず」に言及したのは『明治時代思想史』においてだけでなく、その後も『修身教授大資料』（中文館書店・一九一九年九月）と『日本国民の精神』（明治図書・一九三一年二月）で同様の文脈で引用している。このうち前

者は陸軍の教育機関向けの資料、後者は一般向けの書籍で、とくに後者は満州事変の勃発とも相まってよく読まれたのではないかと推測する。

清原ら日本古来の伝統の価値に重きを置く研究者にとつて、福沢を総帥とする慶應義塾出身者の言論は批判の対象でしかなかった。福沢の弟子の著作でとりわけ否定的人気を保持し続けたのが高橋義雄の『日本人種改良論』で、刊行以来約半世紀の間、日本民族の純潔を蔑ろにするつもりか、という罵倒と共に紹介されるのが定番となっていた。そこに反福沢勢力にとって新たな補強材料として投入されたのが鈴木券太郎の「欧化主義を貫かざる可らず」だったのである。ただし、その本文中にある「脱亜入欧」という言葉は清原によっては紹介されていない。

用語としての「脱亜入欧」に初めて言及したのは『世界経済問題講座』の第四部「世界経済政策」に収録された加田哲二の『国民主義』（春秋社・一九三三年十一月）においてである。その第二編「日本における国民主義の発展」の二「保守的国民主義―佐田介石」に続く三「欧化主義と自由貿易論」は次のように始まっている。

佐田介石の代表するやうな封鎖的国民主義に対抗するものは欧化主義である。欧化主義とはアジアの主義風習を捨て、欧米のそれを採用することである。所謂「脱亜入欧」である。而して、開国主義によれば、この「脱亜入欧」は開国以来の大方針であつて、この西洋文明の採用こそ、日本をして更生せしめるものである。（二六頁）

以下「欧化主義を貫かざる可らず」の冒頭部と結論部が『日本之輿論』を典故としつつ引用されている。清原の著作では表題のみだったものが、ここで初めて本文が紹介され、そこで使われている「脱亜入欧」という言葉が一般に知られるきっかけとなったものと思われる。

加田による「欧化主義を貫かざる可らず」中の用語としての「脱亜入欧」の紹介は『続福沢全集』に「脱亜論」が収録される八カ月前のことである。その刊行後も社説「脱亜論」は昭和二十六年（一九五一）まで誰からも紹介されることはなかった。その間に鈴木の本社説に由来する「脱亜入欧」という言葉の浸潤が先行していたのである。

石河幹明著『福沢諭吉伝』の刊行と同じ昭和七年に初めて引用された「脱亜入欧」という言葉は主として加田によって何度も引用されている。『明治初期社会経済思想史』（岩波書店・一九三七年六月）、『日本国家主義の発展』（慶應書房・一九三八年十月）、『日本国家主義の発展（改訂版）』（慶應書房・一九四〇年九月）、『慶應義塾大学講座経済学』第七卷『社会思想』（慶應出版社・一九四二年八月）、『日本社会思想史』下巻（岩崎書店・一九四九年十二月）等である。

加田が「脱亜入欧」を使用する場合そこに否定的な意味は含まれていないが、慶應義塾外の研究者が用いる場合は「欧化主義

を貫かざる可らず」と同様の批判的な意味合いを帯びる。加田の次に「脱亜入欧」を引用したのは稲毛新の『社会思想解説』（松華堂・一九三九年九月）であるが、「我国古有の伝統を無視して脱亜入欧を以て新しき思想なりとするの風潮が盛んになって来た。これに対抗して興つたのが我国古有の伝統・国粹を保護せんとする国粹主義の思想である」（一八四頁）と「欧化主義を貫かざる可らず」での文脈を離れた「脱亜入欧」の理解を示している。鈴木は政治や経済の制度について欧化するべきだと主張しているのであって、文化について言っているわけではなかったのである。

稲毛はさらに軍警会編の『憲友』第三十四巻第八号（一九四〇年八月）の「社会思想に就て（三）」でも、『社会思想解説』の引用部と同じ言辞を繰り返している（一六頁）。さらに室伏高信の「所謂脱亜入欧、人は鳥跡を捨て、蟹行に走り、横文字のほかに人の真の知識があるものでないかのやうに考へて来た」（「この人を見よ」『室伏高信選集』（潮文閣・一九四一年三月）七六頁）などの記述が続いている。

もっともジャーナリスティックな文脈と学問上のそれとは異なっていて、河合栄治郎や信夫清三郎は鈴木が発言の背景には不平等条約改正交渉という当時の日本が直面していた問題があったことをきちんと伝えていいる。すなわち河合の『明治思想史の一断面：金井延を中心として』（日本評論社・一九四一年四月）や信夫の『近代日本外交史』（中央公論社・一九四二年一月）がそうした業績で、「脱亜入欧」という言葉の解釈一つを巡っても戦後に引き続く福沢評価の割れとでもいうべきものがすでに露わとなっていたことが分かる（註3）。

五 昆野和七「脱亜論」について問い合わせを受ける（一九三七、八年頃）

鈴木寿太郎の社説「欧化主義を貫かざる可らず」とその中にある「脱亜入欧」という言葉は第二次世界大戦終了後もしばらくの間はセットでの引用が続けられる。「欧化主義を貫かざる可らず」はやがて名を高めた「脱亜論」に差し替えられていくのだが、そのことについては後に扱うことにして、ここでは時間を少し戻して昭和十二、三年（一九三七、八）頃の社説「脱亜論」に関する昆野和七の証言について検討したい。

昭和二十六年の遠山茂樹による発見まで『続福沢全集』第二巻に収録された「脱亜論」の存在に気づいた者はいないと思われるが、昆野による昭和六十三年（一九八八）の論文「日原昌造の新聞論説について（前）―時事新報・倫敦通信の全容―」に重要な記述があるとの指摘が平石直昭（『福沢諭吉と丸山眞男』一五四、五頁）によりなされたことによりにわかに脚光を浴

びつつある。少し長いが関係する部分を全部引用する。

昭和十二、三年の頃のことである。或る有力な福沢研究家から、福沢の脱亜論をもう一度読んでみて呉れないか、そしてその感想を聞かして貰いたいといわれたことがあった。それまで、私は福沢の脱亜論は一篇の論説にすぎないので、さして注意もしていなかったが、改めてその感想を問われてはじめて精読してみた。誠に名文である。両三度読み直してその感想を答えたことがあった。福沢は人並みはずれて感情の起伏のはげしい人物である。感情高揚のとき書いたものに名句、名論が多い。例えば、『学問のすゝめ』の幾篇、『文明論之概略』の中の幾つかの章句、海外留学中の弟子に送った日本の近況を報じたもの、明治政治家に贈った書簡など、挙げると際限のないほど、多くの名句、名論を残している。私はそう答えたところ、「たしかに脱亜論は一種の宣言文であり、しかも出来のいいものである。いままで研究家、評論家の間で取り上げているものはないけれども、一度とりあげられると大に物議をかもす運命にあるものと思う。宣言文というのは、その中の片言、隻句がとりあげられて、それが、執筆者の真意とは別になれた方向に、独り歩きをすることが多い」。こう研究家は話したことがあった。戦後二十年代から突如として取りあげられ進歩的評論家といわれた人々や左翼論者などから悪名高い評論をうけることになった。（『福沢諭吉年鑑』十五（福沢諭吉協会・一九八八年十月）一五二、三頁）

この引用によれば遠山による言及より前に「脱亜論」に関心をもった「有力な福沢研究家」がおり、その人物は昆野と相談の上、自らが準備していた論文または著書で取り上げることが止めた、ということがうかがわれる。この有力な福沢研究家とはいったい誰なのか、山田博雄（『福沢手帖』二〇〇号（福沢諭吉協会・二〇二四年三月）九頁）は遠山本人を想定しているようでもあるが、どうなのか。以下でその人物の特定を試みたい。

一九三〇年代に存命だった福沢研究者というのなら、まず最初に頭に浮かぶのは石河幹明であろう。次いで富田正文も考えられる。慶應の教員だったとすると、「脱亜入欧」の初引用者である加田哲一のほか小泉信三・板倉卓造・高橋誠一郎らがいる。慶應外の研究者ならば服部之総・羽仁五郎、さらには遠山茂樹・丸山眞男も研究者としての道を歩み始めている。確かに候補者が多い。

その研究家が昭和二十三年に『統福沢全集』を用いて著作の準備をしていながら、そこに「脱亜論」を引用するのは差し控えたとするならば、その人物は昭和二十六年に初めて言及された後にも「脱亜論」に触れることをしなかったのであろうか。研究家の発言にある「執筆者の真意とは別になれた方向に、独り歩きをすることが多い」とはまことに示唆的で、ほぼ二十年后にその通りの事態となったのだが、そうなった場合でも何も発言しなかったとは考えにくいのではなからうか。

その研究家の正体を探るためにまずは昭和十二年から昭和二十年までに刊行された『続全集』所収社説を素材に用いている著作とその作者を一覧にしてみる。

伏見猛弥・阿部仁三著『福沢諭吉』（北海道出版社・一九三七年四月）

羽仁五郎著『新井白石・福沢諭吉』（岩波書店・一九三七年六月）

富田正文著『福沢諭吉模倣』（三田文学出版部・一九四二年二月）

川辺真蔵著『報道の先駆者福沢諭吉』（三省堂・一九四二年九月）

小林澄兄著『福沢諭吉』（文教書院・一九四三年十一月）

高橋誠一郎著『福沢諭吉』（実業之日本社・一九四四年二月）

この時期石河幹明・加田哲二・小泉信三・板倉卓造・服部之総・遠山茂樹・丸山眞男らは『続全集』を用いた著作を発表していない。公にしていなくても先の昆野との会話は可能ではあるわけだが、まずはこの六冊の著作の作者について検討してから別の七人について考察することにする。

そこで国会DCで調べたところ終戦までに出された六冊の単行本の作者で後年「脱亜論」について何らかの言及をしているのは羽仁五郎と富田正文の二人だけだと分かった。このうち富田は昆野論文掲載時の福沢協会理事長であり、また慶應義塾塾史編纂室で長らく昆野の上司でもあった。もっとも身近な間柄だったわけで、昆野が現に目の前にいる富田を「或る有力な福沢研究家」などと呼ぶのはいかにも奇妙に感じられる。そうなるとここで候補として残るのは羽仁ということになる。

次に昭和十二年から昭和二十年までの間に『続全集』を用いた単行本を著していない残る七人のうち、石河・加田・板倉の三人は生涯にわたり「脱亜論」にまったく言及していない。「脱亜入欧」という言葉の発掘者である加田ではあったが、「脱亜論」には触れていないのである。小泉は死の直前に二回発言している。服部と遠山は戦後「脱亜論」の悪名広宣に大きく寄与した人々である。とはいえ服部については「脱亜論」の存在を戦後になってから富田に問い合わせたという考証がある（『福沢諭吉の真実』二二七頁）。また昭和十二年に遠山は東大国史学科の三年生だった。引用文中の研究家の口調は大学生の申し出としては不自然と感じられる。そして何より服部と遠山は昆野の引用文中の「戦後二十年代から突如として取りあげられ進歩的評論家といわれた人々や左翼論者などから悪名高い評論をうけることになった」とある左翼論者そのものといってよい。この二人と問題の研究家とは別人と判断してよさそうである。

六 「脱亜論」発掘の有力候補者三名（一九三七、八年頃）

こうなると候補者は羽仁五郎・小泉信三・丸山眞男の三名に絞られてこよう。昭和十二年当時の年齢と職責を述べるなら、最年長の小泉が四十九歳の慶應義塾長、羽仁が三十七歳の著述業、丸山が二十三歳の東大助手である。

先ず丸山について検討してみよう。第二次世界大戦後最大の福沢擁護者ともいべき丸山だが、「脱亜論」に触れたのは意外に遅く、昭和五十二年の「古典からどう学ぶか」（『図書』（岩波書店・一九七七年九月）、後に『文明論之概略』を読む』上（一九八六年一月）序文）が最初であった。そこで丸山は、「脱亜論」とは当時の清国と朝鮮の状況を論じたもので、アジア的停滞を脱する上で日本に一日の長があるとする西欧文明の摂取を原則とした論である、としている。丸山が「脱亜論」について積極的に発言したのは晩年のことで、先に触れた平成二年（一九九〇）九月十二日の学士院報告「福沢諭吉の「脱亜論」とその周辺」がその代表である。この報告は論文としては発表されず、出版物とされたのは平成十四年（二〇〇二）、書籍に収録されたのは平成二十一年になってからである。

この報告は、先ず「脱亜論」者福沢のイメージは戦後に登場したことから説き起こし、日原昌造の「日本は東洋国たるべからず」に触れ、さらに『山陽新報』社説「欧化主義を貫かざる可らず」にある「脱亜入欧」論から興亜会の活動について説明している。そうして「脱亜論」は日本の軍事的拡大への決意表明ではなく、興亜会に対抗して西洋文明の摂取を促そうとしたものである、としている。

報告に際して丸山は昭和六十三年（一九八八）の昆野論文を目にしていたはずであるが、昭和二十三年頃昆野がなしたという対話の相手について全く触れていない。その人物が丸山本人だったかといえ、その可能性は低いようだ。というのは、丸山は報告の中で全集や選集への収録状況から「脱亜論」が有名になっていく過程をたどっていて、その調査の結果として一九五〇年代後半から名を高めたという結論を導いているからである。丸山がもしその二十年も前から「脱亜論」に着目していたなら、調査などするまでもなくそれが有名となって行く経緯を注視したはずである。その場合自らによる「脱亜論」の発見をあえて秘匿する理由はないように思われる。

次いで小泉信三についてだが、確認できる「脱亜論」への最初の言及は、死のおよそ半年前となる昭和四十年（一九六五）十一月一日付のサンケイ新聞「月曜論壇」欄に掲載された「国々の離合と向背」にある。その書き出しから第三段落の途中までを引用する。

すでに専門家は先刻承知のことであるが、福沢諭吉の論説に「脱亜論」（明治十八年）というのがある。福沢はそこに日本がアジアのお仲間から脱退することを説いた。説くにはそれだけの理由があったのである。

そもそも日本の開発以来、終始福沢の憂いとするところは西洋強国の東侵の前に、いかにして日本の独立を全うするか、の一事であった。福沢はそのため軍備の拡張を説いたが、火が隣家に燃え移れば自家もまた危ういとて、日本の軍備はひとり日本一国を守るのみでなく、あわせて隣国のシナ朝鮮をも防ぐに足るものでなくてはならぬ、と説いたのであった。

しかるに明治十七年朝鮮問題でシナと争い、またシナ、朝鮮国民の古習に惑溺して到底文明開進の望みなしと見るに及んで、福沢は愛想を尽かし、お仲間入りはご免だと極限して「悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」と言い切ったのであった。事実日本の政策はようやく脱亜の方向へ進んで行った。

（『座談おぼえ書き』（文藝春秋社・一九六六年七月）一九〇、九一頁）

これが小泉による初めての「脱亜論」言及である。注意するべきは引用部の第二段落が「脱亜論」の本文自体からは引き出されてはいないことで、少なくとも「脱亜論」には日本の軍備増強について触れている部分はないのである。この深読みとでもいうべき解釈は、新聞論説執筆からほどなくして書かれたと推測できる「国の離合」における「脱亜論」の扱いにも見られる。

日清戦争の前にはアヘン戦争あり、対英仏戦争あり、日清戦争の次ぎには北清事変ありといふ次第で、シナの対外関係は久しく体面失墜の連続であった。日本の福沢諭吉の如きも、始めは清韓二国と共に西力東漸に対抗することを説いたのであったが、段々失望して遂にお仲間を脱けたいといふ「脱亜論」を書くまでの次第となった。（『国家の死亡・絶筆』（フェリス

出版・一九六六年六月）九一頁）

小泉のこの記述ではまるで「脱亜論」が日清戦争より後に書かれたようなミスリードを誘うものになっている。実際の発表時期はアヘン戦争の四十二年後、清仏戦争の最中、そして日清戦争の九年前である。初出の紙面で辿ってみると甲申政変はもとより清仏戦争も清国が勝利を納めつつあるというのが明治十八年当時の認識で、福沢としては同時期の清国が軍事上体面を失墜させているなどとは思えないことなのであった。

このように小泉の「脱亜論」理解には疑問とするとところがあるのだが、昭和十二三年頃昆野と対話をした相手として小泉を想定することはできるであろうか。小泉は昭和八年に塾長に就任していて、当時昆野の上司でもあった。石河・富田と同様昆野にとって身内も身内であり、そのことを念頭に置いて対話を読み返すなら相手への距離感を強く印象付けられる。「脱亜論」に関する最晩年の発言は結局のところその内容を弁護しているため対話の内容と矛盾するわけではないのだが、小泉を問題の研究者

とするには決め手に欠けている。

最後に羽仁五郎の「脱亜論」評価について検討してみる。羽仁は一九七〇年代の後半に三度触れているが、その一度目は雑誌『文藝春秋』昭和五十一年（一九七〇）六月号に掲載された「一流の思想家」（註4）においてである。そこで羽仁は一貫して福沢を高く評価しつつ、明治十年代以降のいわゆる変節についても弁護を試みている。

それに、最近多くの人が福沢を研究しているんだが、その論点は福沢の思想は変わったのか変わらないのか、もっとはっきりいえば変節したかどうかということだ。これはきわめて重大な問題なんです。その中でも特に議論が沸騰しているのは彼の「脱亜論」、つまり脱亜入欧で、福沢は西洋かぶれであって、日本はアジアの一国であるという自覚がなかったといわれていることがある。

福沢諭吉は一面において、朝鮮や中国に対しても独立自尊を認め、それらの国における革命の見通しをもっていたにもかかわらず、「脱亜論」を書いているのはどういうわけだ。思想が変わったのか、変節したのか、あるいは、あの時代の日本は次第に帝国主義、植民地侵略という方向が強くなってきた。それに押しまわられて挫折したのかという問題ですがね。

『主権ハ人民ニアリ』（潮出版社・一九七九年四月）二十三、四頁

この問題提起の後に「人民の立場に立った思想家」という節が立てられ、そこで福沢弁護が展開されている。羽仁はまず初めに人は老いることで思考が硬直化することを指摘し、続けて次のように述べている。

第二に、歴史というものは過去によって現在を判断することしかできないんですよ。現在を未来によって判断することはできないんだ。だから、福沢諭吉の時代にまだ出てなかった今日の連中が福沢は脱亜入欧なんていって、アジアの自覚がない、西欧かぶれだということはできませんがね。

しかし、当時の状態を考えれば、福沢のいうアジアというのは封建制度ということなんです。封建制度は親の仇だ。したがって、アジアにおける封建制度も親の仇だ。ぼくは、福沢の『脱亜論』にはそういう意味が含まれていると思う。（『主権ハ人民ニアリ』二四、五頁）

日本以外のアジアに封建制度があったのかどうかはさておくとして、このように羽仁は「脱亜論」について反封建主義の点でそれ以前の福沢との一貫性を指摘するのである。

羽仁の「脱亜論」弁護のまとめは『羽仁五郎の大予言』（話の特集・一九七九年三月）「羽仁五郎かく語りき」の「檄13」である。一部を省略して引用する。

檄13 最近、福沢諭吉の「脱亜論」を悪くいう人が多いが、ぼくは、封建的支配のアジアを脱するという意味に解釈している。福沢を下劣だと非難する人は、福沢より下劣である。(中略) ぼくの論文は、近ごろ批評家からたいてい無視されるけど、福沢のことは『文藝春秋』に書いたものだから、朝日の「論壇時評」で取り上げたんだね。「こんな見方もあるのか」って、こじつけだといわんばかりだ。ところが、『PHP』っていう変な雑誌に飯沢匡が『知られざる福沢諭吉』(註5)というのを発表していて、こじつけなんかではないことを証明してくれてるんだよ。青島を日本軍が占領したとき、中国の子供に、中国で一番偉い人は誰かときいたら「孫文だ」という。では日本で一番偉い人はというと「福沢諭吉だ」と答えたというのだ。西洋かぶれしていたわけでも、中国人をいたずらに蔑んでいたんでもないんだ。中国では小学生だって、福沢が中国の近代化を助けたことを知っていたんだよ。(一九九、二〇〇頁)

いわゆる講座派の流れを汲む左翼の思想家の中で、このように一貫して福沢弁護を行ったのは羽仁五郎がほとんど唯一といってよい。先にも触れたように彼は昭和十二年(一九三七)に『続福沢全集』所収社説を駆使して著した『新井白石・福沢諭吉』を刊行している。

以上により主だった候補者の検討を終えたが、こうしてみると昆野と「脱亜論」について対話した可能性が最も高いのは羽仁五郎ということになりそうである。『新井白石・福沢諭吉』を執筆していた羽仁が、「脱亜論」を本文中に盛り込むかどうかについて塾史編纂室の昆野に相談した、というのがこの真相なのではなからうか。

七 「脱亜論」遠山茂樹「日清戦争と福沢諭吉」で言及される(一九五一年十一月)

時代が先走りすぎてしまったようである。ここでは時間を戻して終戦より前に「脱亜論」が紹介されなかったことの意味について考えたい。

先ず前提として一九三〇年代初頭に生じた福沢評価の転換について述べるならば、石河幹明による『福沢諭吉伝』と『続福沢全集』が刊行されるまでの福沢評価は、程度の差こそあれ市民的自由主義者の範疇内にあった。明治版と大正版に収録された諸論説がその範囲までしかないため、それは当然のことであった。中国人や朝鮮人への蔑視的な表現もそこには含まれていなかった。梁啓超や朴泳孝など中国や朝鮮の革命家が福沢を模範としたことに不自然さはなかったのである。福沢伝と『続全集』が刊行されるまでは、慶應義塾出身者を中心にした福沢弁護者は市民的自由主義者だから素晴らしいと称賛し、帝国大学および

軍の学校関係者は、だからけしからん、と言っていたわけである。ところが伝記と『続全集』が公になったため、そこで強く打ち出されている国権主義者としての福沢像が慶應の一部教職員により盛んに称揚されたことにより「福沢ルネサンス」(註6)なる事態が生じたことになった。

この書き換えられた福沢像は第二次世界大戦後には侵略的絶対主義者としての福沢を示す証拠として活動を自由化された左翼陣営により喧伝されることになったが、そうした中でも福沢を弁護し続けた左翼の思想家として今も触れた羽仁五郎がいる。羽仁は戦後二年が経過したばかりの著書『デオコンダの微笑』(三二書房・一九四七年九月)の章「福沢諭吉」中で、

今度の戦争中、慶應義塾総長小泉信三博士が、福沢諭吉の「国権論」を力説されたのは、皇室中心軍閥主義者たちの狂暴に対し、陸軍士官学校あたりが何人の執筆したものか教科書に福沢諭吉の自由主義に対する攻撃をのせて居たりした脅迫的空気に対し、慶應義塾をまもるための死闘中の一戦術として、充分諒解敬意を表せられねばならなかった。それにしても、その一時の戦術をもつて根本の戦術を放擲し、「(前略)或場合には国権論の主張の為に敢て此(国権論と個人主義の)二者の調和を放擲するも差支なし、と決断せられたように見える」とし、福翁自伝の中に日清戦争に言及して福沢諭吉が「愉快とも有難いとも云ひやうがない(後略)」と云つた言を引き、「福沢諭吉の六十余年の生涯、もとより多事多端、思ふに其一生を通じての最大歓喜は、日清戦争であつたとすべきであらう」とまで極言されたことは(昭和八年十二月続福沢全集第四巻月報第三号)、福沢諭吉に対する正しい評価であつたらうか。(一三六、七頁)

と国権論こそが福沢の本質だとする小泉の主張に疑問を呈している。そうしてその後の部分で、実際の福沢とその後継がいわゆる国権論者たちからどのような目にあわされたかについて書いている。

福沢諭吉は、自由を原則とした。しかも彼は彼の「親の仇、封建制度」をついに倒壊し得なかつた。そのゆえに、彼自身が、後世、士官学校生徒等に攻撃され、軍閥財閥官僚のいわゆる「大東亜聖戦」下に凌辱され、時事新報は慶應義塾学生の眼前に圧殺された。それは、彼の原則が誤つていたからではない。いな、彼が日本に稀なる原則ある思想家であつたことは彼の不朽の名譽に属する。(一五四頁)

この福沢評価は先に引用した晩年の言明とまったく同じで、それはとりもなおさず羽仁は小泉らの福沢解釈は誤りだ、と一貫して主張していたことを意味する(註7)。この事実は戦後の思想史上でも重要な事案であるが、羽仁の福沢弁護論は今ではすっかり忘れられてしまった。そうなのはほぼ同時期に論壇に登場した丸山眞男が福沢の再々評価を開始したことから世間の関心が丸山に集中してきたことと、羽仁の弟子である遠山茂樹が福沢批判の急先鋒として戦後の日本史学界の牽引者になったから

のように思われる。

石河幹明による『福沢諭吉伝』も『続福沢全集』も版元は岩波書店だった。伝記が刊行されてから凡そ十三年の間は石河・小泉・富田らの活動により「福沢ルネサンス」なるものが盛り上がったが、それは戦時下にあつて市民的自由主義者としての福沢を再評価する運動ではなく、時局に掉さす国権論者（戦後の左翼の用語では侵略的絶対主義者）としての福沢を前面に押し出すための運動だった。羽仁はその活動を「慶應義塾をまもるための死闘中の一戦術」と見なしていたが、それからほぼ九十年が経過した現在からは、もともとそれが彼らの本音であつたように見える。

その運動に加担していた岩波書店は、戦後は月刊誌『世界』の版元として、戦後民主主義の先導的存在を占めるようになる。そこで華々しい活躍を見せるのが丸山であつたが、その丸山の主張の骨子は、近代日本を代表する市民的自由主義者として福沢を再評価するというものだった。その福沢評価の方向性は、つい五年ほど前までの同じ版元による石河の二つの伝記や『続全集』でのそれとは真逆であることに気づいている人間は気づいていた。その一人が丸山と同年の遠山茂樹だったのである。

遠山は南原繁に続く丸山の第二の発見者だった（註8）。また、丸山の最初の著作『尊王攘夷と絶対主義』（白日書院・一九四八年五月）は遠山と服部之総を加えた三名の共著の形をとっている。この本は東大東洋文化研究所が主宰していた東洋文化講座での個別発表をまとめたものだが、三十八講もあるうちこの三名の発表が特に選ばれている理由は定かではないものの、後年福沢評価を巡って鋭く対立した三名だけに興味深い人選である。大学卒業は丸山が昭和十二年、遠山が翌十三年と一年の違いがあつたものの、二人ともそのまま東大に職を得たこともあつて、ごく近い場所に居続けていて、とくに遠山は丸山を強く意識していたようだ。

こうして「脱亜論」は昭和二十六年（一九五一）十一月刊行の『福沢研究』第六号に掲載された遠山茂樹の「日清戦争と福沢諭吉」で『続全集』に収録後初めて言及されることになるのだが、発行主体である福沢先生研究会とは石河幹明が創設した慶應義塾内の学生サークルである。後年『福沢諭吉全集』が編纂される運びとなつたときにはその下働きをする学生アルバイトの供給源となつた（西川俊作談）。本来は福沢を批判する場ではないわけだが、遠山はそこにあえて侵略的絶対主義者としての福沢を批判する論文をぶつけてきたわけである。しかも「日清戦争と福沢諭吉」は明確に丸山の「福沢諭吉の哲学」とくにその時事批判との関連」（『国家学会雑誌』第六十一巻第三号（東大法学部・一九四七年九月））への反論として書かれている。このようにして「脱亜論」は市民的自由主義者としての福沢像を否定するための有力な武器としてデビューを果たしたのだ。

おわりに

植手通有による『遠山茂樹著作集』第五巻（岩波書店・一九九二年六月）の「解説」によれば、「大学生時代の著者（遠山）は、名著『白石・諭吉』（一九三七年）をまさに執筆していた羽仁五郎から福沢についての話を聞きつつ育った」（三八五頁）という。彼の相方とも言うべき丸山が福沢に関心をもつきっかけとなったのも、同じく羽仁の『白石・諭吉』であった（『丸山眞男回顧談』下巻（岩波書店・二〇〇六年十月）一八四、五頁）。

一九三〇年代はいわゆる「福沢ルネサンス」期にあたっていたが、遠山・丸山ともに福沢への関心が石河による伝記や『続全集』によってではなかったことが要注目である。羽仁の本は『続全集』所収の『時事新報』社説を駆使して書かれているが、市民的自由主義者としての福沢像を補強する内容の社説のみが引用されている。「脱亜論」はもとより「福沢ルネサンス」期において重要視されていた「東洋の政略果たして如何せん」（一八八二年八月）や「日清の戦争は文野の戦争なり」（一八九四年七月）も紹介されていない。

羽仁の本は教育者福沢の実像を描くことを目的としていたのでそれらが使われていなかったとしても不自然ではないとはいえ、同時期に慶應関係者である石河・小泉・富田らは国権論者としての福沢の姿を称揚するのに躍起となっているのに対して、田中王堂の『福沢諭吉』（実業之世界社・一九一五年十二月）を引き継いだ西洋文明の広宣を専らとする福沢が描かれている。この像は明らかに丸山の描く福沢の姿に影響を与えている。

第二次世界大戦後に福沢研究者としての羽仁が忘れられてしまったのは、市民的自由主義者としての福沢の像を強く打ち出した丸山の影響力が日々増していったこと、また、服部と遠山が侵略的絶対主義者としての福沢を強く批判する立場をとったことにより、左翼に与する出版社からは羽仁の福沢弁護論を表明するのが難しくなったためではなからうか。

終戦までの羽仁は左翼系の歴史学会である歴史学研究会の立役者であったが、戦後は東大国史と史料編纂所の後輩で弟子の遠山茂樹にその座を奪われてしまった。羽仁は小泉信三の批判者であると同時に福沢の擁護者でもあり、福沢評価を巡って対立する左右両派にとって扱いに困る存在となる。先に引用した昭和五十四年（一九七九）の『羽仁五郎の大言言』中の「ぼくの論文は、近ごろ批評家からたいい無視される」という嘆きはそのあたりのことを述懐しているのだらう。

本論考の主題である「脱亜論」について羽仁が最初に言及したのは昭和五十一年のこと、遠山による実質的な初紹介から四半世紀が経過して、すでにその名は人口に膾炙していた。一方「脱亜入欧」についてはどうかというと、「脱亜論」中では使わ

れていないその言葉はしばしば「脱亜論」とセットで用いられ、ますます広く知られるようになっていた。「脱亜論」の名が高まるのと呼応するように、用語「脱亜入欧」が初めて使われた「欧化主義を貫かざる可らず」の方は昭和三十六年に神島二郎『近代日本の精神構造』（岩波書店・一九六一年一月）において、翌年稲生典太郎「条約改正論の展開」（『国学院雑誌』第六十三巻第三号（国学院大学・一九六二年三月））において引用されたのを最後に、以後再版を除いて言及されることはなくなるのである。

このようにして一九六〇年代以後の「脱亜論」を中心とする福沢研究の対立軸は定まったのだった。その後の事態はよく知られている物語である。

註

(1) 渡辺利夫『新脱亜論』（文春新書・二〇〇八年五月）、同『決定版脱亜論』（扶桑社・二〇一七年十二月）、西村幸祐『21世紀の「脱亜論」』（祥伝社新書・二〇一五年四月）。

(2) 『時事新報』における「脱亜」の用例調査の結果は本文の通りであるが、他紙についてはどうかと創刊以来の記事本文データベースが公開されている『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』について「脱亜」（脱亜論・脱亜入欧を含む）の用例を調べた。まず『毎日新聞』一九六九年四月二十六日付朝刊（東京版）「災いは脱亜論」、次いで『読売新聞』一九七二年二月一日付朝刊（全国版）「脱亜」から「大東亜」へ（鹿野政直）、最後に『朝日新聞』一九七三年五月十四日付朝刊（東京版）「読書特集・橋川文三著『順逆の思想—脱亜論以後』」が初出という結果となった。現在では人口に膾炙している脱亜（論）や脱亜入欧という用語が一般化したのは一九七〇年代以降であることが分かる。

(3) この点について昆野和七は『三田評論』五三四号（慶應義塾・一九四二年五月）に「最近一ヶ年ほど福沢批判論の賑はつた年はない。昨年の晩冬から初夏にかけて総合雑誌、新聞紙の上でつぎつぎに先生に関する評論が行はれたが、さういふことは嘗てない現象である。それらの福沢論の動向についてみると大体次のやうなことに要約されるであらうかと思はれる。

（改段落）第一には、一昨年の秋頃より昨年の初めにかけて福沢攻撃論が可成り評判になった。それに應ずるかのやうに義塾以外の他校出身の学者、評論家が福沢弁護論とでもいへるやうな筆陣を張つたのである」（『昨秋以来の福沢論』同号一五頁）と書いている。

(4) 羽仁五郎関連の資料は藤沢市民図書館（大庭分館）の「羽仁五郎文庫」に収蔵されている。そこで「脱亜論」に関する記

述を調査したところ昆野の証言にある一九三七、八年の分はほとんど残されていないうえ、その中に「脱亜論」に言及した草稿等はなかった。ただ、「一流の思想家」について新たな発見があった。この談話の初出は雑誌『文藝春秋』（一九七六年六月）であるが、「羽仁五郎文庫」に文藝春秋社の封筒に収められたこの談話の原稿が所蔵されていたのである（資料名「福沢諭吉について」「羽仁五郎文庫遺品目録」（一九九二年三月）三頁D3）。

刊行された『主権ハ人民ニアリ』（潮出版社・一九七九年四月）所収分と原稿を比較すると、「脱亜論」に関する重要な部分が削除されていた。それは刊本二十八頁七行目の後の部分で、その見せ消しを再現するなら、「これが載国輝なんか福沢諭吉にやや同感するところがある点だ。これは封建的支配、専制主義（批判？・平山補記）。だからこのごろの福沢諭吉の脱亜論なんか批判する人が、福沢諭吉ほどの専制主義に対する敵意、あるいは決意というものはないんじゃないか。そういう点では批判する資格なんかない。倫理的に福沢諭吉を弁護してはいませんが、載国輝は脱亜論に対する批判の人々を批判していると思うんですね」（原稿一七四、五頁）とある。

羽仁が触れている載国輝について『討論日本のなかのアジア』（平凡社・一九七三年八月）の出席者紹介には「一九三一年東京生まれ。五五年留学のため来日。六五年東京大学大学院博士課程（農業経済学）修了。現在、アジア経済研究所調査研究部主任調査研究員」とある。なお、羽仁が指摘している載の発言とは、同書にある「きわめて重大なことは、鶴見さんは、日本、朝鮮、インドシナは中国の亜文化といわれましたが、日本は非常に早く、その中国的な文化、儒教文化から脱出して近代化に成功した―福沢諭吉のいう「脱亜」は、中華文化、儒教思想を自ら対象化する一面があったと解釈解釈できると思います―のですが、朝鮮もインドシナ諸国も、ヨーロッパを志向した日本とはまた別なやり方で、中国の伝統文化と思想のくびきを切断しなければならないと思います」（二三六頁）とある部分のことと思われる。

(5) 『武器としての笑』（岩波書店・一九七七年一月）所収。初出は『PHP』（一九七六年五、八月）。第一次世界大戦時の日本軍のエピソードとは以下の通り。「吉野作造博士の随筆の中に日独間の戦闘当時、青島守備軍の司令長官、神尾大将が、占領地内を巡察中、田舎の小学校に立ち寄り学童に「中国で最も偉大な人は」と問うと「孫逸仙」と答えた。次に「日本では」と質問すると多くの学童が反射的に「福沢諭吉」と答えたというのだ。大正初めには、そこまで福沢の名が中国の僻地にまで行き互っていたのである」（岩波新書一八四、五頁）。さらに吉野作造の随筆とは、「孫逸仙と福沢諭吉」（『主張と閑談』第四輯「公人の常識」（文化生活研究会・一九二五年十二月）四一、二頁）のことである。

(6) 国会DCによれば、この言葉は全部で二十九回出現している。最後の二回は『小泉信三全集』（文藝春秋）に再掲された

一九六八年と一九七〇年の分なので除外すると二十七回となる。ほぼ同時期の岩波書店の雑誌『教育』・『思想』一九三五年三、四、五月号と哲学会の『哲学雑誌』同年四、五月号に掲載された石河幹明著『福沢諭吉』(岩波書店・一九三五年三月)の広告文中に見えるのが最初である。『福沢諭吉伝』刊行から『福沢諭吉』までの三年間にその言葉が使われた事実の確認はできていない。他には『三田文学』(三田文学会)誌上の広告(一九三七年八月九月)、慶應義塾の学校案内(一九四〇、五八年)中に現れる。広告文ではない用例の最初は富田正文の書評「石河幹明著『福沢諭吉』」(『図書館雑誌』一九三五年六月号三十一頁、後に『福沢諭吉襍攷』に収録)で、次いで小泉信三の『学生に与ふ』(三田文学出版部・一九四一年十二月)、最後に加田哲一の『思想家としての福沢諭吉』(慶應通信・一九五八年十一月)の三回である。惹句としての「福沢ルネサンス」の発案者は明らかではないが、広告文とほぼ同時に書評が発表されているところから見て富田本人である可能性が高い。

(7) 小川原正道は「小泉信三の福沢諭吉論」(『法学研究』法律・政治・社会)第九十三巻第五号(慶應義塾大学法学研究会・二〇二〇年五月)において羽仁のこの論に触れた後、「こうした批判を受けてか、小泉は占領下にあって、それまでの愛国的・国権的な福沢論を変化させた」(六十頁)と指摘している。その後小泉は福沢の国権論称揚を抑制しつつ立憲君主制の主唱者としての福沢を強調するようになったのである。

(8) 川口雄一編「丸山文庫所蔵資料調査報告・丸山眞男論文献年表(一)」(東京女子大学・二〇一九年三月)によれば丸山に言及した最初の文献は南原繁「懸賞論文選後小記」(『緑会雑誌』第八号(東京帝大法学部緑会・一九三六年十二月))、二番目が遠山茂樹「近世 思想・文化」(『歴史学研究』第九十九号(岩波書店・一九四二年五月))となっている。

